

# 小笠原率兵上京事件と老中板倉勝静

朝 森 要

一  
小笠原率兵上京事件とは、文久三（一八六三）年五月下旬、老中格小笠原図書頭長行がイギリスから借入れた二隻の汽船を含む五隻に、幕府の三兵軍事力約一六〇〇人を率いて海路上京の途につき、大坂に上陸してただちに京都に向ったが在京の將軍家茂により入京を途中でとどめられたことをいう。

小笠原の入京失敗は、江戸の幕閣＝小笠原政権と京都の幕閣＝將軍・老中以下との疎隔などにその原因があったといわれている。しかし、この事件の性格をめぐって、これを軍事力行使による京都尊攘派打倒のクーデター計画とみなす石井孝氏説<sup>①</sup>と、率兵上京の真の目的は、京都への説得であり、当面、軍事力行使を前提とした尊攘派打倒のクーデター計画ではないとする田中彰氏説<sup>②</sup>との対立をみた。この点については、石井氏説に賛意を表するものである。以下本稿では、かかる性格をもつこの事件をめぐって、とくに京都の幕閣に属した老中板倉勝静が、小笠原率兵上京事件に対していかなる態度をとったかを明らかにすることを通して、若干の考察をこころみたい。

## 二

小笠原率兵上京事件前の文久三年の政治情勢を概観すると、三月四日に將軍家茂の入京、一日には、攘夷祈願

のための賀茂社行幸、一七・八日の両日、英仏両国公使から攘夷派鎮圧のための両国軍事力による幕府援助の提案——この提案は小笠原を擁するクーデター計画の導火線となった——、四月十一日、攘夷の節刀授与計画——失敗——と攘夷祈願のための石清水社行幸、二〇日には、五月一〇日を攘夷期限とする旨の上奏がなされ、五月に入っては、九日に、生麦事件などの賠償金の支払、鎖港談判の通告がなされ、一〇日には、長州藩の下関での外国船砲撃による攘夷決行などが行なわれ、攘夷運動は激化の一途をたどっていた。こうした情勢の中で五月下旬に決行されたのが、小笠原率兵上京であった。

この率兵上京事件の契機ともなったのは、生麦事件であった。文久二（一八六二）年八月、幕政改革の大任を終え、東海道を京都に向っていた島津久光の一行が、武州生麦村を通過の際、騎馬のイギリス人四名が行列を乱したとの理由で、一名を切り殺し、二名を傷つけた。このことからイギリスは、幕府と薩摩藩に対して犯人の処罰と賠償金の支払を要求した。一〇万ポンドの巨額な賠償金の支払要求に対して、京都の幕府要路は、將軍の代理として江戸守備のため徳川慶篤を下し、老中格小笠原長行にイギリス人応接を命じて東下させた。小笠原は攘夷交渉の先決を主張したが、慶篤と徳川茂徳が賠償金を支払ってから攘夷の交渉をなすべきだとし、在府の老中もこれに賛成したので、幕議は賠償支払と決定された。小笠原は一橋慶喜との默契の下に事態を修飾し、自ら独断専行の形で、五月九日、賠償金一一万ポンド——生麦事件一〇万ポンドと東禅寺事件一万ポンド——を支払った。<sup>③</sup>

これにより、老中板倉勝静をして「拙者就職以来至難の事のみ指湊ひ、未だ一日として寧日なし<sup>④</sup>」と歎かした生麦事件も、一応の落着をみた。しかし、これはいうまでもなく、攘夷実行を誓約しながら賠償金を支払ったという点で、矛盾撞着であった。かくして小笠原長行は、賠償金支払の責任者として攘夷論者から猛批判を受け、率兵上京することとなったのであるが、ここで時の老中板倉勝静がどんな経歴の人物であったか、少々ふれておきたい。

勝静は、文政六（一八二五）年奥州白河城に松平定永の八男として生まれ、天保一三（一八四二）年備中松山藩主板倉勝職の養嗣子となり、嘉永二（一八四九）年襲封した。嘉永四年には奏者番、ついで安政四（一八五七）年には寺社奉行

兼務となつたが、安政六年、安政の大獄のとき寛典論を主張して井伊大老によりこれを罷免された。文久元（一八六一）年には再び奏者番兼寺社奉行となり、翌文久二年老中となつた。勝静がかかる抜擢をうけたのは、

(一) 勝静が誠忠な人物であり、しかも執政能力を有する名君で、その上、寛政の改革で有名なかの松平定信の孫であつたこと。

(二) 藩政改革の成功により藩財政が富裕で、幕末期における老中任用の要件に適していたこと。

(三) 安政の大獄で井伊大老に罷免されたことにより、攘夷論者の勝静が尊攘派に人気があつたこと。

などによると考えられる。また家柄からみても、初代勝重以来、譜代門閥層として重要な位置を占めている。しかも分家は今までに三人の老中を出しており、その本家であるという点からも、老中になつて当然ではあつた。

攘夷論者としての勝静の立場はどうであつたかという点、それは、朝廷の攘夷論で国論を統一し、幕府の下に挙国一致体制を整え、いったん鎖国して外敵を迎え討つたのち、対等の条件で開国を行なおうとするにあつた。それは、いわば、攘夷大開国論ともいふべきものであつた。

### 三

小笠原長行は、元勘定奉行水野忠徳・町奉行井上清直・目付向山一履らとともに率兵上京を図り、五月二五日、海路大坂に急行した。その目的は、兵力の圧迫をもつて攘夷の勅諭を撤回させることにあり、このためには京都尊攘派を一掃し、將軍を尊攘派から解放しようとしており、もし天皇があくまで攘夷令の撤回を承認しないときは、天皇の廃立・配流をも辞さないという強硬な決意をもつていたようである、といわれている。

これを探知した在府の備中松山藩士川田剛は、陸路急行して小笠原よりさきに大坂に到着し、勝静に内報した。

小笠原は、五月晦日、大坂に到着した。六月朔日、小笠原は大坂を發して京都に向い、枚方にいたつて宿泊した。

小笠原上京の報に接した朝廷は、驚愕はなはだしく、大騒ぎとなつた。在京の閣老も大いに驚き、二日の朝、若年寄

稲葉正巳はみずから馬を馳せて迎え、これを止めようとしたが、小笠原はきかず、なおも進んで淀に入ろうとした。そのとき、使番の松平甲太郎がきて、朝廷側の現況を述べてとどまることを説いたので、やむなくその日は淀に一泊し土屋正直・向山一履の両目付を上京させることに決した。こう決したのは、目付が將軍に面謁して上言せんと願うときには、老中でもこれを止めることができないのが幕府の慣例であったからである。

三日の日は空しく暮れ、四日には老中水野忠精が淀に來た。終夜激論がたかかわされたあげく、水野老中は説破され、それでは五日の朝、別段の沙汰がなければ直ちに上京されたし、との約束を残したまま帰京したので、明けて五日には、夕刻を期していよいよ上京ときまった。ところが、その後になって、使番の能勢金之丞を通じて、「為を存候処は悦候得共、存外之事出来候而者不宜候間、御所へ申上呼寄候間、夫迄見合可申候」との將軍の親書が到來した。そこで、いままで上京することを主張して強く入京を望んでいた小笠原も、幕閣の一員としての立場から將軍の親書には抵抗できず、ここにおいて涙を吞んで思いとどまらざるをえなかった。しかし、隨行の幕吏や陸軍の幹部は、非常に激昂し、朝意によって上京をとどめられるのは、われわれを乱臣賊子と見なされるからであり、その意を奉じて退くならば、甘んじて乱賊をもって自分を処するものである。後代にいたるまでも、徳川氏の臣属に乱賊の汚名を残してはならない、としてなおも小笠原を擁して上京せんとの勢を示した。

五日付の三島毅・林保兩家臣から在大坂の山田方谷（勝靜のブレン的存在）に報じた書簡によると、勝靜があくまで小笠原の入京に同意しなかったこと、および攘夷論を固守していたことが知られるとともに、小笠原の上京をめぐる諸有司などの動向を知ることができる。

擬昨晩申上候（小笠原図書頭）図書様一件、君上御議論は、尾老公は勿論諸有司不承知にて、先御退役御申付も無之、又外藩家老立会も無之、水野様大小目付を卒ひ詰間に御出被成候由。夜前淀に御一宿今朝迄御帰り無之趣。昨日は、伝奏議奏衆を御城にて御饗応、御多忙にて直に御城に御泊りに相成、両生共如何相成候事哉と心痛仕候共致方無之、今朝御帰宅の上早々御目通を願ひ、先つ御前御すわりの処、如何と奉候候処、御城にての御議論は、今般図書以下

西上致候は、此地同列は勿論、公方様迄江戸議論に入つて仕舞度存念なれば、公方様を不忠不義違勅の逆臣に致し、徳川氏即日滅亡(アタ)を不顧事故、決して同腹致しかたしとて種々御論に相成、一同尤には申せとも、内実は彼に応度存念も可有之、此地諸有司の腹も大抵分り候。井沢美作守の説に、此処にて余り敵數御正罰有之候は、江戸御帰の節君上御身危き由申候へ共、是は固より覚悟致方無之と御論判被成候由。安五郎(山田)初兼て申候通、江戸にて黑白明弁の事、即今日に迫り候故、議論筋立不申は、此地にて退役致候決心と被仰候。数日以来御処置被仰越候通に敵數参兼候へ共、右の御決心を承り、兩人とも感泣難有奉存候事に御座候。今般は臣下より不申上、君上よりの御決心故、間違有之間敷。猶百折不撓御正論御突立の段懲憑仕、罷下り候事に御座候。諸有司にて御入京詰問の議なるに、是は君公決して御聞入不被成、淀に相成候様被仰聞候<sup>⑩</sup>。

六日、勝静は、御三家の臣水野彦三郎(尾張)・伊達五郎(紀伊)・原市之進(水戸)を従えて淀に行き、小笠原を詰問した。淀の学校明親館にあつて終日議論の末、それでは是非その筋を説得した上で、上京の都合を図ることにしようといつて、薄暮帰京の途についた<sup>⑪</sup>。このことについて、石井氏は、その入京を阻止するには、板倉のペテンを必要とした<sup>⑫</sup>、とされているが、結果的には諸般の事情からしてペテン同様な結果になつたとしても、そのときの勝静の心情は、そうとはいえない。勝静が小笠原に入京の都合を図ろうといつたのは、これ以前の勝静の議論からいつても、少なくとも勝静が、小笠原との議論の過程で、熱弁にうたれて態度を軟化した結果と考えられる。といふのは、七日付の三島の方谷宛書簡に、「右の吟味を致して入京為致てはと君公被仰候へとも、是は決して不宜、何分御役御免御達の上、檻車位にて御入京可宜と申上置候」、また、「君公様は御正直故、決して右等の事(筆注「禁裡を焚き、鳳蓋を彦根に奉し度悪計あり」をさす)は有之間敷と被仰候へとも、人心難量可畏事に御座候」とみえていることと、これより先、小笠原の入京をあくまで反対していたことを思い合はすとき、そのことが推測できる。だいたい勝静は、その公用人などとして二十年來側近に仕えた辻七郎左衛門が『艱難実録<sup>⑬</sup>』の中で「正直固情に深き御性質にて、御誠意余りありて機権果断の足らざる御方なり。(中略)よりて他人にも詐偽なきものと思し召、人を見損い、人に欺かれ給ふ事まゝ

多し」と評しているような性格であったから、ペテンといったような術策をろうしたことはまず考えられない。方谷でさえ、「君上の御正直一方には困り入申候」と歎いたほどの勝静であったから。

勝静が小笠原を淀に訪ねた六日、最早詰問に及ばず、一兩日中に必ず厳科に処すべしとの朝命があり、さらに八日、「小笠原図書頭職祿を奪ひ、大坂城代へ預置、右以下同断之者、夫々取締相付候儀可然事」とかさねて厳科に処すべき朝命があり、九日、將軍家茂は京都から下坂して、小笠原の職を免じ、大坂城代に預けた。ここに小笠原率兵上京事件は落着をつけ、この事件は、たんに一時京摂間を動揺せしめたにすぎないものとなった。

#### 四

かく小笠原の率兵上京が失敗に終わったのには、いくつかの理由があることが、石井・田中両氏の研究<sup>⑩</sup>によって明らかにされている。

その第一は、当時の風説書に、

且幕府に而も此節朋党相分、江戸御老中と京都御老中と隔意に相成、江戸御老中方に而者、板倉、水野二侯は王朝方に相成候杯、兼而不満に被存候哉に相聞得申し候。又江戸御役人方之中に者、承久之故事杯御主張被成候方も有御座哉に而、何れ將軍御滯京中者、互に情意不相通候模様<sup>⑪</sup>に御座候。右之意気合故、京師在留之御老中、一円御心得も無之事件杯急に申し来り、大に相驚き狼狽、御吟味替り等に相成候事杯、度々有御座哉に追々承り申候とみえるように、「京都御老中」將軍・老中以下と、「江戸御老中」小笠原の親外派政權に分裂しており、意志疏通を欠いていたこと。第二には、小笠原率兵上京内部での、水野忠徳の對尊攘強硬派と小笠原長行の姿勢の差である。水野は、小笠原が大坂上陸後、京都の幕閣の反対をおしきって「上京するの断なく、會・桑の異議あるが為に空しく其機を誤り、彼等をして志を遅くせしむるは千載の遺憾なり」と語らなければならなかった。つまり、そこに示されているように、對尊攘派への強硬論を主張する実力派吏僚層が、この率兵上京段階では、なお幕権内部でその主導

権を握りえなかつたことである。第三には、小笠原に通じていた公卿姉小路公知が、小笠原の大事決行のまゝに暗殺されたことなど、にあつたといわれている。

こうした理由が、結局、小笠原率兵上京を失敗に終らしめたことはいうまでもないが、勝静の態度もそれにあづかつて力があつたといえよう。六日になつて小笠原との議論の過程でその態度を軟化させたとはいえ、それまで勝静がこの度の率兵上京は「公方様を不忠不義違勅の逆臣に致し、徳川氏即日滅亡を不顧」との理由から、諸有司らがやもすると「内実は彼に応度存念も可有之」、「諸有司にて御入京詰問の議」の態度をみせたのに対して、断固反対したことが、少なくとも將軍親書を引き出すことになつたといえよう。つまり、勝静の強硬な反対がもしなかつたとしたならば、小笠原の率兵上京もある程度容易にその実現をみたのではないかと考えられる。かかる意味において、会津・桑名藩などの率兵上京に対する異議があつたとはいえ、この事件において演じた勝静の役割は、まことに大きかつたといえよう。

將軍家茂は、大坂での長らくの滞在が不測の事件を生むことを恐れて、海路東帰の途についた。將軍に従い六月一日、江戸に帰つた勝静は、一九日辞表を呈して、

全体前以時勢ケ様有之候処心付候ハ、此段上聞ニ達し、御英断ニ而何と歎可然御処置も可有之候処、愚直之余り只管攘夷之御趣意相守、遂ニ今日之場合ニ至案外仕候事、全く先見不相立供奉職無状之故と奉存候。右様不才浅智之身ニ而、天下之大任ニ当り候而は、所謂蚊負山之類ニ而、第一賢路を妨、向後如何様之御大事を誤、何等之御不都合仕出し候も難斗、戦慄恐懼寢食不安次第ニ御座候。

と述べた。しかし、將軍家茂の懇望にあうや、「何分不肖の我等厚蒙上意の段、実に恐入候儀、家筋の儀も候へは、徳川家と存亡を共に致候は申迄も無之、当然の儀」なるを理由に、「たとへ蒙汚名候とも忠義の二字を不失、水火に入候とも尽誠忠、御譜代の魂を不失候様決心致」との決意のもとに、方谷らが勝静の辞職を望んだのにもかかわらず、辞表を撤回してしまふのである。ここには、譜代としての強烈な使命感により幕府に対する忠誠をつらぬこうとした

勝静の心意がみられ、勝静の性格の一端をうかがうに足る。

以上、小笠原率兵上京事件当時に老中であつた勝静が、この事件でどのような態度をとつたかを明らかにしてきたわけであるが、勝静の断固たる入京反対の態度が、のちになつてその態度を軟化させたとはいへ、少なくとも率兵上京事件を失敗に終らしめた一つの要因であつたことは、否定できないであろう。ここに、この事件をめぐる勝静の史的役割を見いだすことができる。

注

① 石井孝「生麦事件後における英仏両国公使の幕府援助提案と幕府の対応」(『東北大学文学部研究年報』九)、「幕末における半植民地型政変の企図—英仏の対幕援助提案と尊攘派打倒クウデータ計画—」(『歴史学研究』二五二)、「小笠原閣老率兵上京の性格について—田中彰氏の批判に応える—」(『日本歴史』一七三)。

② 田中彰「幕末の政治情勢」(『岩波講座日本歴史』一四、近代一)、「幕府の尊攘派打倒クウデータ計画説について—小笠原率兵上京をめぐる—」(『日本歴史』一七一)。  
③ 維新史料編纂事務局『維新史』第三卷四五四—四七七頁。  
④ 洪沢栄一「徳川慶喜公伝」巻二、二二四—二二二頁(東洋文庫)。  
⑤ 山川浩「京都守護始末」一一六—一一八頁。  
⑥ 日本史籍協会「続再夢紀事」第一、一五頁。

⑦ 拙著『備中松山藩の研究』二二頁。  
⑧ 加藤義範「幕末政治上における板倉勝静—徳川慶喜との関係を中心として—」(鎌田博士還暦記念歴史学論叢)。  
⑨ 三上昭美「幕末老中の政治的基盤—板倉勝静の場合—」(『歴史教育』一四〇)。

⑩ 石井孝『学説批判明治維新論』二六六頁。  
⑪ 田村栄太郎『板倉伊賀守』九一頁。

⑩ 田辺太一著・坂田精一訳『幕末外交談』二、五八—六〇頁(東洋文庫)。淀での水野老中の詰問にあつた、勝静は、小笠原の「御役御免無御座而は不相成」との意見であつたが尾老公をはじめ諸有司一同が不服であつたので、「夫にては、御同席に而御糺被成候様相成、甚失体に相成候間、老公御出席無御座而者不相成」との意見であつたが、これもいれられなかつた(山田準編『山田方谷全集』第三冊、一八五—二頁)。

⑪ 山田準編『山田方谷全集』第三冊、一八五—一六頁。因分胤之編『魚水実録』前編、二五—三頁。

⑫ 田辺太一著前掲書六〇頁。勝静の淀行に対して家臣は強く反対したが、結局淀行となつてしまつた。その間の事情については、三島の方谷宛書簡によつてうかがうことができる。水野詰問に参候へとも、此処深意味あり、御直ならては不申上と申事にて、無抛帰り候へ共、上京を許す訳にも不参、又々我々へ詰問に可罷出様被仰付候故、罷越との御意にて一同大驚、水野様の御出既に御失体、又々君公傲尤御出は不宜、御老中態々御出て、不申上は先方の我儘故、頓着不被成、何分違勅の廉にて御役御免、其上存念は書付にて申出候様被遊度、其議論不透時は、御退役被遊候より外無之と外記(金子)殿始同志一同より申上、何分御出延引宜と御勸申上候処、一旦御聞届にて、若年寄大小御目付尾紀



水会四藩の家来を暫時延引可致様御申遣に相成候跡にて、又々御考直し、何分時刻迫り御差支に相成候故、別儀の通一先参り帰る候上は、早速罪状御正に議論敵敷申立、不行ときは是非退役致と御諭故、其論に任せ、曉天より御出、七郎左衛門富太郎并に私共も御供被命罷越候処、又恥を御かき被成候。深意味は御直ならては難申上、何分上京仕度との事にて、色々皮膚の論のみにて晩刻御帰りに相成申

『山田方谷全集』第三冊、一八五六―七頁。

方谷も勝静の淀行に対して、「今更申上候ても不返事に候得共、淀の御出斗は御留申上様は無御座事に候いしや、残念千萬奉存候。乍去此一失着にて御奮発被遊、断然御進退の種とも相成候は、却て転禍為福の基にも可有之と奉存候」と述べて、淀行を失計とするとともに、小笠原の入京に強く反対した(『山田方谷全集』第三冊、一八六一―四頁)。

⑬ 前掲石井孝「小笠原閣老率兵上京の性格について」。

⑭ 『山田方谷全集』第三冊、一八六二頁。

⑮ 高梁市立図書館蔵。

⑯ 『山田方谷全集』第三冊、一八六四頁。

⑰ 多田好問編『岩倉公実記』上巻、七四〇―二頁。維新史料編纂事務局の『維新史』第三巻の四四九頁に、次のような記述がある。すなわち、「下坂後將軍は屢々小笠原長行を引見したが、当時在坂の幕吏中には、長行の行動に同意してゐる者が多く、彼を敵罰に処するを不可と為し、中には『此処にて余り敵敷御正罰有之候は、江戸御帰りの節君上御身危き由』(『魚水実録』)と迄噂する者もあった」と、国分胤之編の『魚水実録』を引用して当時の情勢を説明しており、文脈か

らみて、君上とは將軍をさすようにもとれる書き方をしてゐるが、この引用史料は、本稿中でも引用しているように、六月五日の三島・林の方谷宛書簡の一節で、君上とは明らかに勝静をさすものである。

⑱ 石井・田中両氏の掲諸論文など参照。

⑲ 国書刊行会『官武通紀』第一、五七四頁。

⑳ 『山田方谷全集』第三冊、一八五五―六頁。国分胤之編

『魚水実録』前編、二五二―三頁。

㉑ 『幕末外交談』の中で田辺太一は、小笠原率兵上京の失敗に関連して、「さらに惜しむべきことは、先発して上京した水野癡雲(忠徳)が板倉閣老に面会をもとめたのを、同閣老が拒んだことである」として、このことは「思えば、また残念な次第である」としている。小笠原が水野を勝静のもとに派遣したのは、「かねて御懇意にも候間、何かと御相手にも相なるべく」との理由からであった。田辺もいつてゐるように、まず水野を入京させ、小笠原らの意表を勝静に明示させて、ともに事を謀らうとしたといえようが(前掲『幕末外交談』二、六三頁)、これからすると、勝静が水野との会見を拒否したことが入京不成功の一因となり、このことは注目される点である。

㉒ 勝安房著『開国起原』巻下、二五二―二頁。

㉓ 『山田方谷全集』第三冊、一六九二―三頁。

(本稿は、一九七三年二月岡山大学で開催された中四歴史学地理学協会大会において、「文久三年の小笠原率兵上京をめぐって」のテーマで口頭発表したものに加筆し、成稿したものである。)